

## 「ザンビア大学獣医学部技術協力計画」のフォローアップについて

岩手大学農学部附属家畜病院  
安田 準

南部アフリカに位置するザンビア共和国には、日本の無償資金協力と技術協力により設立・維持されてきたザンビア大学獣医学部がある。1985年から12年間の長期にわたりJICAプロジェクトが展開され、多くの日本の獣医大学教官が長期・短期専門家としてザンビアに渡り、ザンビア大学教官となって新設された大学の教育や運営に当たった。通常の技術協力ではカウンターパートとなるのは「国づくりを担う人」であるが、本プロジェクトでは「国づくりを担う人」を作り出す「教師づくり」を目標としたのがユニークであり遠大な計画でもあった。12年間の技術協力の成果として学部長、学部長補佐、講座主任など主要ポストに日本で博士号を取得した若手ザンビア人が就任し、学生への直接指導は現地スタッフで賄える状況になり、学部教育に関しては技術の伝達は完了した。しかしながら多くが卒業後10年以内の若手教官であり彼らを指導できる老練な教官は少なく、教官の年齢構成が極端に偏向している。今後次世代の教官育成は自前の大学院で行われることになるが、その維持発展は研究活動と密接に連携する。学部教育に必要な人材は確保されたが、次世代教官の育成に関しては大学院制度を確立したからといって現状では楽観視することはできない。私は短期専門家として2回、プロジェクト終了時評価の調査団員としてもザンビアに渡り、また学位取得のためザンビア大学卒業生が北海道大学に留学した際の指導教官としても、このプロジェクトに関わりを持つ機会を得たのでその体験を述べたい。

本来獣医学は各国の実状やニーズに沿って、長い歴史の中で発展してきた実学である。本プロジェクトは獣医学のフィールドが全くゼロの状態から12年間で卒業生150名近くを輩出し、大学院教育制度の確立までなしとげた。このこと自体は大きな成果であるが、ザンビア社会基盤の整備、ザンビア経済の自立性などと調和を計りながら進展してきたとは言いがたい。これまでは日本からJICAの物資援助で大学の機能は何とか維持されてきたが、ザンビア国全体の社会基盤の充実が計られていかないと、獣医学の教育研究水準の維持は困難である。しかしながら現状では他のアフリカ諸国と同様に国家予算は破綻しており、プロジェクトが終了すると自前の研究費は無いに等しく、せっかくこれまで培った成果が砂上の楼閣として霧散してしまう恐れが現実の問題としてあった。JICAサイドの本プロジェクトに関わる組織としてのフォローアップは別途議論することであるが、獣医学教育の実務面に関わってきた者としては大きな関心事であった。そこで本プロジェクト参画の機会に培われた獣医学研究者のネットワークを駆使して文部省科学研究費を申請し、日本に留学経験のあるザンビア大学若手研究者を研究協力者にして共同研究を開始した。通常の海外学術調査では研究実施者が海外研究機関に協力を求めて、研究実施者側のニーズに沿った研究を展開するが、我々の共同研究では我々サイドの研究目的を展開することは当然ながら、更にザンビア人研究者が我々の研究費を利用して彼らの暖めてきた研究を遂行できるよう最大限の配慮をした。冒頭述べたように彼らは日本で学位を取得した教え子たちであり、我々の研究スタンスを理解できる研究者である。日本でも大学院終了後数年しか経験のない若手研究者が、独自に研究費を取得する機会はそう多くはないであろう。ザンビア人若手研究者がそのような機会に恵まれることはさらに少ない。海外からの援助はともすると金額が大きくてもやりっぱなしの援助となり、若手研究者の資質向上に使われることはまずない。我々研究者個人に配分される研究費は国家援助とは段違いに微々たるものであるが、彼らと共同研究の形態をとり、個々の論文にまで議論できるつながりを持つことが究極的フォローアップであろうと考える。現在の枠組みではJICAによる技術協力は技術移転が目的であり、本ケースのように技術移転は終了したが独り立ち困難な案件は多々あると

思われる。せっかく築き上げた「人づくり」のフォローアップに、名古屋大学農学国際教育協力研究センターが果たす役割は大きいと考え、今後のセンターの発展を期待する。